



民主党オープン・フォーラム

近現代史研究会 2

田中角栄の平和思想

講演者 早野透氏 朝日新聞社社友

桜美林大学教授

二〇一三年三月七日 一七〜一八時三〇分

参議院議員会館B一〇四会議室

「上り列車」の時代・など「上り列車」は早野さんが角栄さんを語る際のさわりの文句のひとつ。雪国新潟でも東京と同じ暮らしができるよう生活格差をなくすというのが、政治家としての田中角栄の初心であり所信であり、終生変わることのない執念だった。

「三國峠を切り崩す」

と力むところに角栄さんの面目躍如たる心情の発露があった。藤井裕久座長も、「お前のような東京生まれの東京育ちに雪がわかるか」と叱られたことがあるそうだ。

昨年一〇月に出版した早野透著『田中角栄―戦後日本の悲しき自画像』（中公新書）が版を重ねている。そのことから今回のタイトルを決めたという。安倍（晋三）さんが政権をとったり、日本維新の会が台頭したりと、わかりづらい昨今の政治現象に遭遇して、田中角栄がどういう政治家であり、人物だったのだろうかという関心が横で動いているのではないかというのが、自

著の売れ行きへの著者の読みである。

早野さんは首相官邸の執務室の前に押しあいへしあいして取り囲んだ番記者（首相番）をして以来その死まで、田中角栄という「上り列車」の英雄を政治記者としてみてきた。「客観的」でありづらいほどの至近距離で。

没後二〇年の歳月が今、「戦後日本政治の体現者」（新書のオビ）である人物の多面的な理解を可能にした。オビには著者の要請による「戦後民主主義の中から生まれ、民衆の情を揺さぶり続けた男の栄光と蹉跌」とある。終幕での「金権政治」が角栄像を覆ってきたが、民主主義・金権政治・平和思想が今、多面的に田中角栄をとらえるフアクターだという。

「民主主義」と「平和思想」のふたつこそ、敗戦でうちひしがれた自らを鼓舞し、戦後の民衆の心情を揺さぶりつづけた政治的原点で、それは「大正」という時代の雪国越後の貧しい農村に生まれて、「二等兵」という軍隊体験を持った若い日の経歴に由来すると早野さんは指摘する。

体験的具体的な生活デモクラシー。

学歴が高等小学校出で終わった角栄さんは、生まれ育った風土と戦争から得たそれらを体験的に具体的に訴えて、「政治は生活」の立場を頑固に貫いた。「抽象思考ゼロの体験主義者」と呼んだのは立花隆である。

戦後体験としての「生活」は何より家族の魂の安息所である「住宅」。そして「道路」。道路は天皇と軍隊のための国道であったものを東西南北につなげて、公共の福祉のためとした。この系譜は小沢一郎の「生活が第一」にまでつながる。

農村を豊かにする第二次産業の誘致、「日本列島改造論」は、理研の大河内正敏の「農村工業」に体験的根っこを持つ。国外移民ではなく国内開発を説いた石橋湛山の平和主義「小日本主義」と通ずる「農村工業」を実践した大河内は、一九三二年に角栄少年の地元柏崎に拠点「柏崎工場」をつくっている。

「戦争」については、満州の戦場で「二等兵」として殴られた話ばかりで「大東亜共栄圏」も、満州に派遣されたのに「五族協和」も決して口にしなかった。

曲折の末に「上り列車」の終着駅、田中首相が誕生したのは、一九七二年七月七日。戦後三〇年近くを経過した自民党政治は劣化して官僚主導と金権政治に陥っていた。その中に大きく関与したまま「平和」への一大セレモニーとなった日中国交正常化で華やかに始まった政権は、二年半にして「田中金脈」問題で崩れ折れるように終わった。その後も「金権政治」の暗部を明かすロッキード事件の被告人として過ごし、亡くなったのは一九九三年八月九日に非自民細川（護熙）政権の成立した年の暮れのことだった（二月一六日）。新潟三区での田中角栄の得票数は初当選の一九四七年四月、三万九〇四三票。ロッキード判決後で最後の一九八三年一〇月、二二万〇七六一票。

「田中角栄の平和思想」について。

田中角栄の「憲法」については、ロバート・ケネディとの対話（一九六二年二月）に示されているように、「アメリカが敗戦国である日本に押し付けた憲法はわが国に根付いてしまった。どうしても防衛力を増やしてくれと言うのなら、アメリカから日本国民に対して改めて日本国憲法の成立過程について一言あ

ってしかるべき」とした。また「九条」については、ロベール・ギランとの対談（一九七一年一月）で「憲法改正はあるのか」と問われて、「ある時期に改正されることはあったとしても、戦争放棄をうたっている九条が改正されることはない。それは原爆の先例を受けたという理由による」と答えている。

組閣にあたっての「国民への提言」（私の十大基本政策・一九七二年六月）でも「②憲法九条を対外政策の根幹にし、中華人民共和国との国交回復をすみやかに実現し、アジアと世界の平和に貢献する」と提案している。

元首相として田中さんは、一九八〇年一月の「自民党結党二五周年」の特別番組（TBS）で、「憲法第九条は少なくとも日米安全保障条約を生み出した。そのために膨大な軍事費の支出を抑えることができて、再建に専念し、平和な日本を作ることができた」と述懐し、「憲法改正」を急ぐ必要はないとした。

この立場は解釈改憲路線となり、PKO派遣、周辺事態法、インド洋自衛隊給油、イラク派遣となしなくずしになってはきたが、集団的自衛権をいう中曽根、安倍憲法論とは違った経緯をたどっている。角栄さんが東京へむかう「上り列車」は三国峠を越えたあと上州を通過する。そこには同年同月（大正七年五月二七日）生まれの中曾根康弘がいた。中曾根さんは海軍主計科からの中尉で「二等兵」を避けている。角栄死後二〇年、長寿を得て「憲法改正」に執念を燃やし続けている。

「二等兵」が共有する「平和の思想」。

早野さんはここで、田中角栄と同じ「二等兵」経験をもつ「大正生まれ」の人物をそろえて「大正人の平和思想」を述べる。

田中角栄は大正七年五月四日生まれ。昭和十三年、騎兵二等兵。朝鮮で終戦。丸山真男は大正三年生まれ。東大助教として陸軍二等兵で出兵。その経験をもとに戦後「超国家主義の論理と心理」を書いて戦後民主主義のリーダーに。渡辺恒雄は大正一五年生まれ。砲兵連隊二等兵。靖国神社参拝には否定的。山中貞則は大正一〇年生まれ。環境庁初代長官で歌人。

「永劫にかかる凄惨の戦ひを禁じて誓ふ平和憲法」と詠う。そして壮年に達した「大正生まれ」の男たちのぼやきを綴った「大正生れ」の歌（一九八〇年ころ）が歌われた。

「大正生まれの俺たちは、明治の親父に育てられ・・・」（大正生まれは一九二〇～一九二六年）。「大正生まれの青春は、すべて戦争（いくさ）のただなかに・・・」（一九四五～昭和二〇年には三〇～四〇歳）。「大正生まれの俺たちにや、再建日本の大仕事・・・」（一九八〇年には六八～五四歳）。「大正生まれの俺たちは・・・休んじやならぬぞなあお前」（二〇一三年には一〇一～八七歳）。戦後平和を語る時、男たちのぼやきの陰で銃後を守り戦後世代を育てた妻たちの存在を見落としてはなるまない。

「この世代もほとんど亡くなってしまった」と早野さんはいったが、これは一九四五年生まれの早野さんの早トチリである。三〇〇万人余の方々が活躍しており、次（*参考）のような方がなお健在だからである。歴史を学ぶ手法のひとつとして「先達（大正人）を訪ねて」学ぶことに努めなければなるまい。

地域再生（地域開発）の「平和主義」。
最後に、早野さんはジャーナリストとして敬愛する石橋湛山の「小日本主義」を取り上げ、大陸への拡大より国内の開発を

主張した湛山の系譜に田中角栄を置いた。湛山よりは著書には詳しい「農村工業」の推進者、理研の大河内正敏につながることに触れなかったために、『農的小日本主義の勧め』の著作をもつ篠原孝議員から質問が出たが、昭和戦後時代にコンピュータ付きブルドーザーといわれながら国内開発に挑んだ田中角栄の「日本列島改造」に、いま平成時代に冷静な「地域再生」を成長戦略として置いてみることに田中角栄見直しの契機がある。企業の海外進出の先方に限りが見え、対外的脅威が叫ばれて国防軍が声高にいわれるとき、地域再生（国内開発）に国民の関心を引き戻す「平和主義」の主張は決してひ弱ではない。

マイクを握った早野さんは桜美林大学での講義と違って、「角栄さん」を知っている人がいる会場だけに自在に話せる放出感があったようである。何よりそこは田中真紀子さんが属する政党の会であり、当人が姿を見せることはなかったが、会場のみなさんの脳裏には女史の姿が去来していたにちがいない。真紀子さんの父上の時代にことだから、若い議員には「近に近い現代史」の会であった。

（二〇一三・三・一五）

堀内正範 ほりうち・まさのり

朝日新聞社社友 元『知恵蔵』編集長 「月刊丈風」編集人

*参考・大正人の名簿

1915 / 大正4年 1・2 / むのたけじ 1917 / 6年
1・11 / 日高六郎、1・12 / 秋山ちえ子 1918 / 7年
5・4 / 田中角栄、5・27 / 中曾根康弘 1920 / 9年

年 2・12 / 山口淑子、3・23 / 川上哲治、5・9 / 森光
 子、5・30 / 安岡章太郎、12・24 / 阿川弘之 1922
 / 11年 5・15 / 瀬戸内寂聴、6・18 / D・キーン、9・
 12 / 内海桂子 1923 / 12年 1・10 / 松山樹子、1・
 20 / 三國連太郎、4・19 / 千宗室、5・24 / 鈴木清順、
 6・12 / 竹内実、9・30 / 下河辺淳、11・5 / 佐藤愛子
 1924 / 13年 1・2 / 河合雅雄、1・15 / 倉嶋厚、1・
 16 / 京極純一、2・8 / 久米明、2・18 / 陳舜臣、3・3
 / 村山富市、3・25 / 京マチ子、4・5 / 金森久雄、4・3
 0 / 伊藤雅俊、5・11 / 田中光常、6・25 / 丹阿彌谷津子、
 11・14 / 鈴木登紀子、11・25 / 吉本隆明 1925 /
 14年 1・22 / 清水司、1・23 / 木下東一郎、2・27
 / 豊田章一郎、3・12 / 江崎玲於奈、3・15 / 原寿雄、3・
 17 / 小尾信弥、3・20 / 梅原猛、3・31 / 永井路子、4・
 6 / 桂米丸、4・25 / 富永一郎、4・27 / 木村明生、5・
 10 / 橋田壽賀子、6・12 / 大田昌秀、6・26 / 杉本苑子、
 6・28 / 大関早苗、7・23 / 色川大吉、8・21 / 篠原一、
 8・27 丸谷才一、9・17 / 杉下茂、9・19 / 岡田卓也、
 10・20 / 野中広務、11・6 / 桂米朝、11・27 / 鎮目
 恭夫 1926 / 15年 (5月12月25日) 1・8 / 森英恵、
 1・12 / 三浦朱門、2・15 / 松谷みよ子、2・25 / 多湖
 輝、3・15 / 辻久子、3・20 / 安野光雅、4・17 / 小川
 宏、4・30 / 河野多恵子、5・30 / 渡辺恒雄、9・1 / 石
 井ふく子、9・19 / 小柴昌俊、11・22 / 大塚初重、11・
 30 / 中根千枝さんのみなさん、ほかに多くのみなさん。